



校長室だより

令和5年度

5月19日

NO. 7

田植えをとおして学ぶこと 「稲作りは人なり」

田んぼを抜けていく風は爽やかで、最高気温30度を超える山間を、涼しく包んでいきます。17日には、全校で、秦梨小恒例の田植えが行われました。運動会練習の真ただ中ではありますが、朝から子供たちは着替えやスリッパなどを準備して登校し、やる気満々で、田んぼに向かいます。

この日のために、準備をしてきたのは5年生。何度も田んぼに足を運び、誰よりも田んぼと関わってきました。



15日の「代掻き」では、たった4人で、広い田んぼに肥料をまいたり、田んぼを踏みならしたりしてきました。足元もおぼつかない田んぼで、すぐにぬかるんだ大地にしっかりと足をつけ、大変な作業を、次第に要領を得ながらこなしていく姿からは、たくましさを感じました。

そして、それを支える担任の社本先生の熱さややる気が、子供たちを鼓舞します。「すげえ」の一言一言からは、田んぼに対する誰よりも深い思いと、目の前で活躍する子供たちへの愛が、溢れ出ています。「今年の子たちは少ないけど、いつも以上によく動く」「将来、農家やるといい」など、田の先生からのお墨付きも、子供たちを後押しします。

5年生に教えてもらいながら、田植えをする子供たちからは、どの子からも笑顔がこぼれます。おそろおそろ田んぼに足を入れる下学年の気持ちは、これから、いろいろなことに挑戦しようとするときの気持ちに、似ているかもしれません。そしてそこには、足を踏み入れたからこそ得られる思いと楽しさがあります。「田植え」をとおしても、みんなで一つのものをつくっていく、そんな気持ちのつながりが感じられました。

「もの作りは人なり」と言われますが、まさに「稲作りは人なり」と思います。5年生の子は、いろいろな場で「田の先生」の鈴木さんや早川さんのお話を聞く機会があります。代掻きの時も雨で待っている間、子供たちはいろいろな話を聞きました。稲作のことだけでなく、植物や生き物の話、今の仕事の話や地域の話、将来の子供たちに望むことなど、「田の先生」は、「田」だけの先生でなく、いろんな先生でもあります。



「鈴木さんの田んぼは美しい」と学区の人から言われる鈴木さんは、なんでも知ってみえます。早川さんは本当に稲作りが大好きで、挑戦する気持ちは人一番です。こうした人たちによって、



「稲作り」は、成り立っているのだと感じました。

学区にはこうした「先生」がたくさんいます。「ふるさと学習」は、もちろんふるさとのことを学ぶわけですが、ふるさとの「先生」から学ぶことに意味があります。そこには、普段の授業では学べない、思いのこもった、生涯に関わる学びがあるのだと、改めて思います。